

S 氏邸訪問記(2026.2.11)

1. はじめに

オーディオ仲間の中でも最高のハイエンドユーザーである S 氏が構築されたオーディオルームについては、一昨年も訪問させていただき、S 氏邸訪問記(2024.9.17)で報告しました。その後、S 氏はモノラルレコードの再生に意欲をもたれ、かずかずの名盤を揃えられたとのことで、今回 ST 氏とともに訪問させていただきました。

2. S 氏邸のシステムの概要と試聴対象

今回試聴させていただいた S 氏邸のシステムは前回と大きくは変わっていません

スピーカー：TANNOY Autograph(Monitor Silver・オリジナルキャビネット)

プリアンプ：Marantz 7

パワーアンプ：Marantz 2×2

アナログプレイヤー：Thorens TD126III BC Centennial

アーム：SME 3009

カートリッジ：Ortofon SPU-GE

Ortofon SPU-CG25

特注チューニングモノラルカートリッジ

ステップアップトランス：Ortofon T-3000

CD プレイヤー：PHILIPS LHH-1000

PHILIPS LHH-2000

以上の名機の特性を活かし、完成度の高さも考慮しながら、必要、かつ効果的と思われる箇所にリスニングルーム構築当初より助言を受けながら種々の対策を施していることは前回報告しました。

今回は、以上のチューニングも含めた成果を、S 氏が最近、調べておられるモノラル盤を種々聴かせていただきました。

また、当方からは下記モノラル盤を持参しました。

日本 Columbia XL 5060

ピョートル・イリイチ・チャイコフスキー ピアノ協奏曲 1 番変ロ短調

ゲザ・アンダ (ピアノ)

アルチェオ・ガリエラ指揮フェルハーモニア管弦楽団

PRESTIGE 7079

SAXOPHON COLOSSUS (St.Thomas)

Sonny Rolins Quartet

3. S氏邸のシステムの試聴経過

モノラルカートリッジは、S氏が保有している特別にチューニングされたものを対象にしました。

S氏が準備された盤は順不同で下記のとおりです。

エテルナ 8 20 522 (B)

J.S.バッハ カンタータ第 111 番

ギュンター・ラミー指揮ライブチッヒゲバントハウス

エテルナ 8 20 441

ヨーゼフ・ハイドン 交響曲第 100 番

オットマール・ズイトナー指揮ライブチッヒゲバントハウス

US バンガード HM 55B

J.S.バッハ 無伴奏ヴァイオリンソナタ・パルティータよりシャコンヌ

ヨーゼフ・シグティ (ヴァイオリン)

スプラフォン SUA-10059-60

ニコロ・パガニーニ 24 の奇想曲

イヴァン・カワチウク (ヴァイオリン)

フランスコロンビア ラッカー盤

ヨハネス・ブラームス 2 重協奏曲第 3 楽章

ダヴィッド・オイストラッフ (ヴァイオリン)

ピエール・フルニエ (チェロ)

フランスコロンビア 33FCX243

L.V.ベートーヴェン 弦楽 4 重奏曲第 7 番「ラズモフスキー1 番」

ハンガリー4 重奏団

これらは初めて知るレーベルもあり、そのイコライザーカーブは未知のもので、最適の条件選択ということではなく、いきおい比較的よさそうな条件を見つけるということになりました。

試聴の方法は、Marantz 7 はステレオとモノの切り替えができ、イコライザーカーブが RIAA と Columbia の切り替えができますので、適宜 2×2 の切り替えを行いながら試聴していきました。

まず、以上の盤すべてに言えることは、Marantz 7 のステレオとモノの切り替えについては、モノの位置が音の焦点が合いますので、これで決まりという印象です。

イコライザーカーブの RIAA と Columbia の切り替えでは、はっきり Columbia カーブが良さそうだというものと判断がむつかしいものがあります。例えば、フランスコロンビア盤では Columbia カーブかなと思いましたが、決めかねることがありました。持参したチャイコフスキーのピアノ協奏曲 1 番は拙宅のステレオのフォノイコライザ

一でも Columbia カーブが合いましたので、ここでも Columbia カーブが合うような印象です。また、持参したサキソフォンコロッセアでは、拙宅のステレオのフォノイコライザーでは Columbia カーブが合いましたが、ここでは、ジャズに詳しい ST 氏からシンバルその他のエッジの聴き方が詭るので RIAA カーブを取りたいという感想でした。確かに Columbia カーブでは音が引っ込み、焦点があいまいになります。拙宅では位相反転をすると音の焦点があいまいですので、位相の問題もあるかもしれません。

音楽ジャンルとの関係では、バッハのシャコンヌやパガニーニの 24 の奇想曲など単音源の曲では、これ以上の表現はなかろうと思われるくらい、蠱惑的というか、ある種の麻薬的な魅力さえ示します。

また、バックにオーケストラが加わっても、バッハのカンタータ第 111 番のアグネス・ギーベルのソプラノやブラームスの 2 重協奏曲のオイストラッフのヴァイオリンとフルニエのチェロなど慣れ親しんだ演奏での実在感の説得力があります。

以上、壺にはまるとこれ以上の魅力はないという印象ですが、イコライザー特性への対応の問題が次の課題として残ります。

4. まとめ

ハイエンドのヴィンテージシステムの見本みたいシステム構成に種々チューニングを加えられた成果を、モノラル盤の言わば熟成された音で堪能させていただきました。さらなる飛躍を期待するとすれば、モノラル盤のイコライザーカーブに対応したフォノイコライザーを有するプリアンプなどを入手することも考えられますか、次善の手段としてモノラル盤のレーベル毎のイコライザー特性の情報を入手し、Marantz 7 のトーンコントロール機能を活用して疑似的にイコライザー特性に対応するアプローチなどが見えてきました。

以上